



足が^びつる

川崎ゆきお

「涼しくなってくると、持病のようなものが出ますなあ」

「私もです。足が引っ張ります」

「足」

「最初の一步がぎこちないのです。足が硬くなったような。前に出すのがゆっくりになり、引くときもゆっくりです。二三步歩けばスムーズに行きますがね」

「血の巡りが悪くなったのでしょうかなあ」

「そうかもしれません。夏の間は、そんなことはなかった」

「年ですなあ」

「いや、若い頃からです。子供の頃はそんなことはなかったのですが、十代後半からですかねえ。特に真冬はいけません」

「ずっとそんな感じですか」

「いや、治ったこともあるんです。そのときは気付かなかった。歩き始めですが、足がつるって意識、ずっと持ち続けているわけじゃありません。つったとき、ああ、つったと思うだけです。急いでいるときでも、ゆっくりになります。余裕を持ってゆっくりじゃなく、それ以上スピードが出ないのですよ。こむらがえりのように痛くはないのですが」

「それは困りますねえ。会社内とかでは」

「はい、しかし、年を取ると治ってきました。あまり出なくなったのに、最近思い出したようにたまに出ます。若い頃より軽いですがね。ひどいときは最初の一步が出ないこともありましたよ。何をしているのかと不審がられました。椅子から立ち上がるまではいいのですが、最初の一步が、だから医者で順番待ちをして呼ばれたとき、歩けないと不細工ですよ。足が悪いんじゃないのにね。それは若い頃ですよ」

「それは若者らしくない。私は笑うと顔の筋肉が戻らないことがあります」

「え」

「あ、本当に戻らないのなら、ずっと今も笑顔のままですよ。戻ることは戻るのですが、戻りが遅いのです」

「それも寒くなってからですか」

「そうです。顔をくしゃっとさせるとだめです。夏の間は何ともなかった」

「それは若い頃からですか」

「ああ、そうです」

「じゃ、それも年じゃないんだ」

「そうです。あなたと同じで、年を取ってから、それは減りましたよ。多少はありますが、戻りが早くなっているの、気付かないこともありますなあ」

「足は」

「足には出ません」

「足の場合はきついですよ。電車のドアが開きますねえ」

「はい、電車のドアね」

「ドア前で立っていて、さあ、降りようと思うが、足が出ない」

「ほう」

「若い頃ですよ。これは誤魔化すのが大変だ」

「段差が少しありますねえ」

「あります。だから、少し一歩が大きくなるような感じになります。それで引きつります」

「どうしました」

「降りませんでした」

「一歩が出なかったと」

「だから、ドアの前には絶対に立たない。二三歩歩く余裕が欲しい。助走がね、いや助歩です」

「はい」

「若い頃でしょ」

「そうです。これは治るものです。多少は残っていますがね。こうして少し寒くなってくると出ることは出るので、軽症です」

「年を取ると良くなってくることもあるんだ」

「今なら、年寄りなので、足がつっても、気になりませんが、若い頃はそうはいかない」

「年を取ってから治る。いいこともあるんだ」

「そうです。長い年月をかけて、微調整されたんでしょうねえ」

「誰が」

「だから、体が自然に」

「ああ、はいはい」

了